

# フレールベルの生れた家

—フレールベル誕生百五十年記念會講演—

倉 橋 惣 三

今日は只今堀教授からお話のありましたやうに一昨日即ち二十一日記念致す可きを今日に延期致したわけであります。年々のフレールベル誕生日は全國でそれ／＼種々の記念の集りが催されますが、わけても本年は百五十年でありますから、さぞかし盛な記念會が世界各地に催されて居るでせうと思ひます。未だその詳しい様子を知る機會を持ちませんけれども、私の知る所では、フレールベルの始めて幼稚園をつくつたブランケンブルヒに於きまして、先月の廿九日から此の二日迄、最も盛なる五十年記念會が催されて居ります。本日のごゝの會は一日後れて居りますが、ブランケンブルヒのは大變先に急いで行はれて居ります。思ふに、各地に於いて廿一日を中心に會を致しませうから其處から集

る人の爲に、わざとその日を避けて早く行つたものでありませう。廿九日から二日までの日は、午前、午後、夜、とぎつしり種々の催しが行はれます。特に獨逸のフレールベルに関する錚々たる學者が適當な講演をされて居ります。いろいろの題目がありますけれども、要するにフレールベルの偉大さを禮讚し、偲ぶものであります。その中の一日、三十一日であります。特にフレールベルの生れたオーベルワイスバツハの教會でお祭のやうなものが行はれます。それからブランケンブルヒのフレールベルの始めて建てた幼稚園で、子供達の集りがあります。又、夕方からは、各地から集つた人が特にフレールベルの夕としての晩餐會を致します。晩餐會に講演にお祭に、實に盛な會を致しました。お互も、も少

し近いならば、ブランケンブルヒに出席したいと思ひますが、それでは此方の會に間に合ひませんから、心の中で思ひ、心の中で割愛しました。由緒深い土地で行はれるのでありますから百五十年の會としては最深い記念會であります。我國に於きましても、この機會においてそれ／＼の方面の方と一緒に盛大に記念會を擧げたい、擧げべきと感じました。その準備も整はなかつた爲と、やがてフレーベル先生の所謂百年祭がまゐります。百五十年が先に來て百年が後に來るのは變なことであります。偉人を偲ぶのは大體亡くなつた年から數へます。今年のゲーテ百年祭も亡くなつた年から數へてゐあります。外國の雜誌などにも一九三二年にはゲーテ百年祭とフレーベル百五十年祭ありと出て居りますが、一方は生れた時から數へ一方は亡くなつた年から數へてゐる譯であります。よつぽど頭がよくなければチュウブランになります。そこで、そのフレーベル百年祭がやがてまゐりましたら、その時こそ皆さんと大いに準備して、世界に負けない會を御一緒に擧げたいと今から考へて居ります。それで記念すべき百五十年はさ

ゝやかな記念講演會だけになり、ブランケンブルヒでやりましたやうに、式典も子供の集りも、又特に今晚は晚餐を差上げる用意ありません。御銘々御自宅でフレーベル先生を偲びながら各個晚餐をやつて戴きたい。但、記念講演會であります。今日のは普通の講演會とは違ひます。私とアルウキン先生は話をする役、皆さんはお聴きになる役、堀さんは全體を司會する役、といふのでなく、フレーベル先生の寫眞を中心にして、私は口で、皆さんは耳で、でなく全衆心を一にして、フレーベル先生を偲び、又尊敬致して居るのであります。左様な性質の會であることを特に申上げておきます。

○

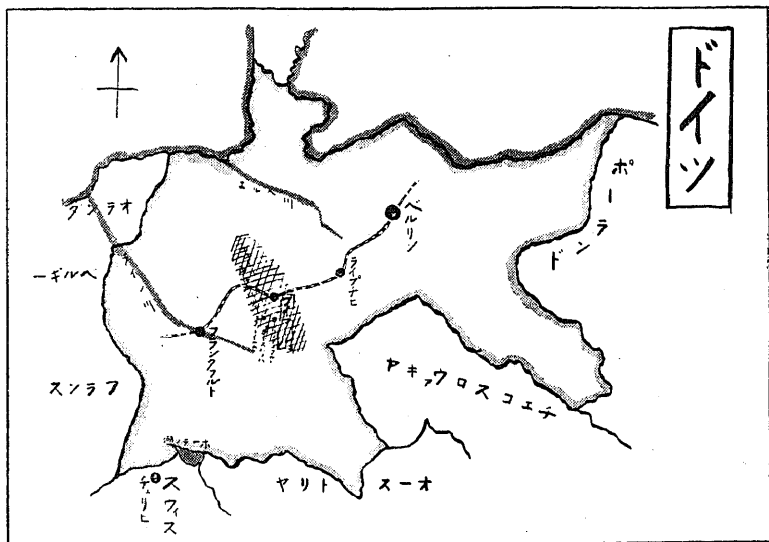
私は如何にして今日の百五十年記念日を語るべきか思ふ可きかを考へました。いろ／＼な、偲び方があると思ひます。私に若し音樂的技能有るなら、こゝに立つて、——おゝフレーベル、フレーベル——と謳ひたいと思ひます。さうしますと皆さんがこれに合唱して、バラツク講堂もフルヘベルといふことになりませう。心持はそんな所に

ありますが、私としては散文的な話をする他ありません。

しかも散文的な話としてのフレーベルの傳記は皆さんよく御承知であり、私も機會ある毎にうるさく申上げて來ました。フレーベルの學説を叙するとなると、平生は少し位間違つたことも平氣で言ひますが、今日間違つた事を言ひますと後の祟りよりも今の祟りが恐ろしい。此の上のフレーベル先生の額が飛び落ちて、私はまたガクゼン（愕然）とさせられることになりませう。さういふ風な險呑な痴しいことをさけて、私は、生誕記念であるから生れた所の事を語り、私の事だからつひ脱線するといふところ或は話がこぼれるといふことになるかも知れませんが、主題は『フレーベルの生れた家』として、お話申上げます。アルウキン先生が御出でになりましたなら、この方こそフレーベル先生の妹御さんの様な方でありませうから、フレーベル先生の心もちに入つたことはアルウキン先生にお願ひしたいと思ひます。で私のは、所感といふよりも、事實の話でありませうから、斯様に地圖や繪葉書を貼り並べて、私の話をそれて補ふことにしたのであります。

○

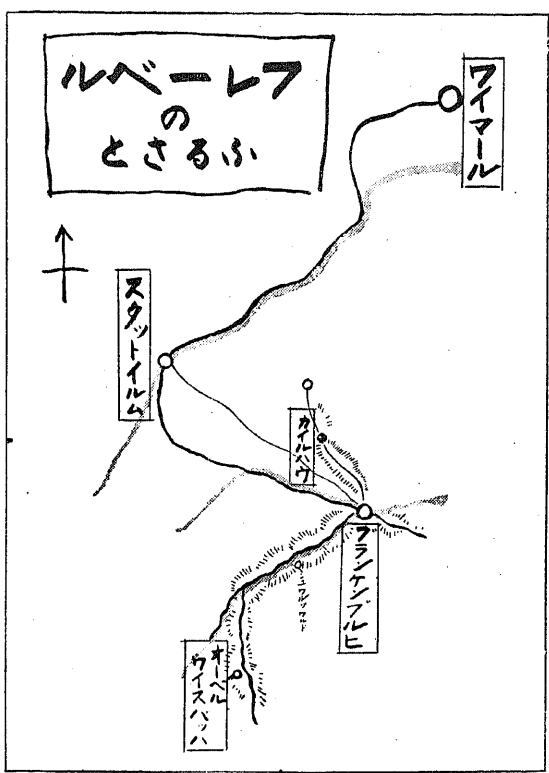
フレーベル先生の生れたオーベルワイスバツハはドイツ全體の何邊にあるかを先づ知り度いと思ひます。大體の地形を申しますと、ドイツの中心ベルリンは大體ドイツの北の方に在ります。ベルリンからは實に澤山の鐵道が出て居りますが、其の一つでライプチヒを通り、ワイマールに到ります。ワイマールは皆さん御承知の様にゲーテのためにゆかり深い地でありまして、ゲーテ百年祭としてはワイマールに於いて盛な會が行はれました。そのワイマール地方はチュウリンギヤ森林地帯といふ名稱になつて居ります。大體土地其のものが高くなつて居て、奥深い森林地であります。そのワイマールから本線を離れて、別の線の汽車で行くと、ブランケンブルヒであります。そこから山に入りましたのが、ワイスバツハであります。ワイスバツハには下ワイスバツハと上ワイスバツハとありますが、上ワイスバツハが先生の生れた土地であります。私は矢張りワイマールの方から參りましたが若しも他から行くならばワイマールを経ずして、直接に行く道もないではありません



んが便利な道は此の方になります。

私は一九二一年一月の初めに大學の休暇を利用して参つたのでありますが、最も寒い時でして、道としてはブランケンブルヒから参りましたが、そのブランケンブルヒからオーベルワイスマツハには、汽車もない電車も通つてゐない、乗合といふやうな交通機關もない、丁度今から二三十年前の木曾街道の様な状態の處でありました。その邊全體の土地はドイツではシュワルツタール（黒谷）と云つて居ります。又その邊の森の事をシュワルツワルド（黒森）と云つて居ります。黒いといふのは、緑以上に奥深いからであります。そこは一種の景勝地であります。フレイベル先生を慕ふ人でなくとも幽邃を慕ふ人は参りますが、一月の寒い時節には、餘程のものづきか信仰家でなくては参りません。私はフレイベル先生信仰で巡禮して参りました。馬車を仕立てまして、森林に取り巻かれた細い道を上つたり下つたりして参りました。谷間の溪谷美は實にきれいでした。その時は冬ですから、一切が氷を懸けて一段の美しさでした。ブランケンブルヒから、上つたり下つたりしながら

ら段々高くなつてオーベルweisバツハに着きます。オーベル即ち上と云つてあるとほり高原であります。極く小さい村であります。その景色は口で描寫出来ませんが、所謂



高原の氣さわやかな土地であります。オーベルweisバツハに入りましてから直きに中央廣場に出ます。其の左側、即ちランケンブルヒの方から來て左側にフレイベル先生

の生れた家があるのであります。小さな一軒建であります。先生の居られたそのものが残つて居りますので大いに古びて居ります。只今は其家に牧師さんが住まつて居りまして私は不慮に家の中に入つて見せていただきました。其の牧師さんは餘りフレイベルに深い研究を持たない方のやうでした。興味は持たないでせうが、研究的興味では無いと見え、いろ

く話がかれやうと思つてまゐつた豫想に反し餘りお話がなく僅かにフレイベルの書かれた手紙のやうなものが仕舞つてあるのを見せてもらひました。

○ 家の形は大體左様に御承知していただきます。その淋しいオーベルweisバツハの山中で百五十年前の一昨日、矢張りフレイベル先生もオギアと泣いてお生れになりました。そこで、家の事を話しましたからそのお生れになつてから暫くの子供時代の事を話しますと、お父さんは牧師さんでフレイベル自身の書く所に

よると相當に忙しい、厳しいお父さんのやうでありました。村全體の人の爲に忙しいので家族の爲に家で親しむ間もない。當時の神學の考も相當に厳しいもので、何方かといへばこわいお父さんでありました。フレイベルはお父さんの恩は感じて居りましたが、父親に對する親しみは極く薄く終生本當の親しみを持たなかつた、といふ意味に取れる言葉を使つて居られます。殊に氣の毒なのは生後九ヶ月の時生母が亡くなりました。そこで一切の世話は召使がするようになり、一緒に暮すのは兄さん達になりました。この表に擧げてありますやうにフレイベルは五人兄弟の末子で、しかも姉妹は無かつたのであります。その兄さん達の中に一緒に暮して來ましたので、親から所謂慈味溢るゝ許りに可愛いがられるとか、或は同じやうな年齢の子供同仕で遊ぶといふことはありませんでした。それをフレイベル自身も種々に思つて居りますが、我々もフレイベルを偲ぶ今日誠に淋しい事に思ひます。四歳になつた時に第二のお母さんが來ました。フレイベルは非常にこれを喜びました。母に飢へて居る子供の心としてよろこびました。それから

暫く母の幸福を味ふ事が出來ましたが、やがてお母さんはカールポポといふ御自身のお子さんを生みました。それから先を私が解釋を下すと種々とむつかしくなりますから事實だけ申しますが、フレイベル自身の言つてゐる所では、お母さんとフレイベルの親しみは一日一日と減つて行く。母は自分の生んだ子供の方へ親しんだとあります。つまり母といふものに恵まれなかつたのであります。斯うなりましたのはお母さんが悪いのではなかつた、フレイベルが悪かつたのかも知れませんが、兎に角く母の愛を満喫出來ませんでした。のみならず、お父さんの嫉が厳しかつたのであります。一方で厳しくても一方がやさしければよろしいのですけれども。それでフレイベルは非常なやんちゃ者、暴れ者に見られました。その上に、私もその家の實地を見て十分調べることが出來ましたが、左様なよい土地にあるに關らず、家そのものは周圍の建物でとり圍まれて居ります。前は教會、後は岡、左右は家です。家の外に出て遊べば廣いのでありますが、厳格なお父さんでありますから、外に一步も出しません。フレイベルは僅かに、清らかでは

あるが、狭い青い空と、垣越しに吹く風を楽しみました。お母さんに甘へることもせず、お父さんには始終は會ひもせず、年長の兄とだけ遊んで友達とは交渉はなし、それで云はゞ頗る快活ならざる子供になつてしまひました。フレールベルの言葉で申すと、人と交るよりも窮屈なる自然と交るばかりであつたのです。その爲に、フレールベルの生活は外に放散することなしに内へ／＼向つて行きました。殊に後になつてあの教育思想を生んだ程ですから、生來の天才的なものが、一層、内へ／＼と向けた事もありませうが、陰氣な沈んだ物思ひに耽ける、とんと可愛氣ない子供になつてしまつたらしいのです。一人で居れば子供のくせに考へ込み、遊べばいたづらになる、家の中では慊はれ者になつてしまひました。フレールベル自身でもどうも面白くないので、家を出て行きたい、我が家に居づらひ氣持になつたと書いて居ります。丁度十歳の時母方の伯父が訪ねて來ました。今日の我々のなかにもある如く、どうもあの子は可哀いさうなことだ、と、遠慮しつゝ訪ねて來て、様子を見取り、父と相談して引き取りませうといふことになりまし

た。そして引き取られて行きました。これが嚴密に云つて十歳と九ヶ月、その伯父さんの家はスタットイルムといふ所で、オーベルワイスパツハよりも當時に於いては賑やかな所でありました。スタットイルムに於けるフレールベルの生活といふものは、自分の家とは打つて變つた生活で、我家で得られなかつたものが得られました。かうした全境遇そのものが幸福か否かは分りませんが、兎に角く子供として、毎日幸福でありました。伯父さんも矢張り奥さんを亡くした方で、年取つた義理のお母さんと暮して居りました。その家庭はフレールベルのお父さんと違ひ、實にやはらか味、温か味のあるものでした。それで子供としての命は一ぱいに發揮されたとは彼自身の言葉であります。こゝで外に出て遊ぶのを許され、近所の小川へ山へと廣い自然に接し、又家に歸ればやさしい伯父さんがやさしくして呉れました。しかも伯父さんは牧師でありましたから、楽しい子供らしさを基礎として、宗教といふものが與へられました。自分の家ではピリ／＼した中で宗教を教へられたのでありますが、こゝでは子供らしい生活の中で、宗教感化を與へ

られました。伯父さんはお父さんのやうな活動家といふよりも、静かな生活をして居た人でありましたから、思想生活といふものも學びました。宗教的なこと、子供らしいこと、そして考へるといふ事は、フリーベルの全生涯に於て其の一大特色をなして居りますが、これはスタッツイルムに於いて育てられたと考へられます。即ちフリーベルを生み出したのは、オーベルワイสบツハ、フリーベルを育てましたのはスタッツイルムであると言つていゝでせう。スタッツイルムは只今相當に盛な土地になつて居ります。此の伯父さんの家を探しましたが、見當りませんでした。併しフリーベルのライフに於いては左様な重要な地位を持つて居ります。話がまざりますが今日はフリーベルの子供時代だけをお話し致しますので、大きくなられての思想方面はアルウキン先生に願ふことに考へて居りますが、御承知の様に、二十三歳の時フランクフルトで教育に志して、ペスタロツチ先生に學んで、自分の故郷に歸り教育に従事しました時に、先づ子供に觸れましたのは、幼稚園でなく、又學校でなく、家庭教師でありました。二番目の兄クリス

トフに三人の子供があり、これを先づ育てたのが教育實習の始めで、それが此スタッツイルムのグリースハイムでしたから、フリーベルの教育の心を育てたのも矢張りこのスタッツイルムであつたのは非常に面白い事だと思ひます。

○

こゝに四五年餘り居て家に歸りました。その間にチョコクチョコ歸つて居ります。『やはり自分の家は楽しい』と云つて居りますが、もよりの事と思ひます。歸りました時は十四歳餘りになつて居りました。家には何しろ子供が多いし、兄さん達は勉強して居りますので、お父さんはフリーベルに大して正式の學問を勉強させる氣は無かつたやうでした。フリーベルを前にして、何に成らせるかの話がありました。其の中の一はオーベルワイสบツハの役場の書記にいれようと話が進みましたが、斯んな若い書記があるものかといふので、止めになりました。その次にお母さんの言ひ出した方も止めになりました。その時役場の書記になつて居りましたら、その生涯はどう變りましたらうか。私は殆んど變つた事になりましたらうと推定致します。が



とう／＼の道もつかないので、フレイベルの希望に任されることになりました。ところが、その時十五歳のフレイベルは巖藝家になりたいと望みました。とに角、書記や先生でなく、園藝の方へ行きたいと申しました。私は何故園藝に行き度いか。園藝そのものが好きだから、山が好き、野が好き、森が好き、だからといふ理由です。そこでお父さんは好きなことをしたがよいといつた工合で、口を探して呉れて、或る大きな園藝家の所に二ヶ年の約束で、奉公ではありませんが見習に入りました。その二年間は明らかに云へば、極端な意味でいへば、植木屋の小僧のやうなものです。併しフレイベルは實に面白く仕事をしたのであります。二年の年期が済みまして家に歸りました。親方はこれからのものになるからもう少し留めて置かふといふ考もありましたのに、フレイベルが勝手に家へ歸つたに就てお父さんとの考の行きちがひもあつた様子で、何となく家が面白くなく、それで又家を飛び出さうとしました。餘程自分の家庭に恵まれない譯です。そして、丁度その時に、エナ大學に學んで居りますフラウゴツド兄さんに學資を持

つて行く使をお父さんからいひつかりました。皆さん御心配下さらぬように、先に申上げて置きますが、フレイベルは決してその金を持つて出奔はしませんでした。フレイベルは幼い時から兄さん達が、家庭を離れてゐるのをうらやましく思つて居りました。その兄さん、しかも一番話の合ふ直ぐ上の兄さんが居る、しかも有名なエナの大學に行けることはどんなに嬉しかつたでせう。それが丁度十五歳の夏の事でありまして、大學では夏の講義が始つた時で、フレイベルは直ぐに歸るべき所が、大學がとても好きになつて、兄さんも居てもよからうといつて、お父さんに御願ひの手紙を出して呉れました。そこにいろ／＼のいきさつもありましたが、夏をエナに過して大學の講義をかぢりました。なめた位だつたでせう。それから家に歸つて、今度は自ら熱心に、エナに入れて貰ふ様に歎願しました。段々話をして居る中に費用の道がつけば大學にやつてもいゝといふことになつて、母の遺産を管理人から渡して貰つて、それでエナ大學に入學しました。これが故郷を飛び出して學問の生活に入つた第一歩で、十七歳でありました。フレイ

ベルは、まことに青春激潮の時期をエナに過しました。従つて、こゝで種々の學課を學びましたけれども、どうも矢張り林や森や土が好きなものですから、職業としては林業の方に行く事になりました。

これから先の話は打ち切らうと思ひます。その林業家が、ふとしたことから教育といふものに興味を持つやうになり、ペスタロッチに教を受け、カイルハウであの『人の教育』を著はし、ブランケンブルヒで幼稚園を創めた話は『教育者フレイベル』のお話になります。私の今日のお話は其の前の『子どもフレイベル』のお話であります。兎に角く、フレイベルはそんなわけでオーベルワイズバッハに生れ、人間の中といふより自然の中に育ち、自然を體得すると共に、いろんな事情で思想癖の性質になりました。『神のテンプルと自然のテンプル』といふやうのことを自分で云つて居ります。之れは此の十五歳位迄のライフから當然歸納されるものであります。そして、それを教育に打ち込んで幼稚園の創設者になつた事は誠に意味深いものと思ひます。私は丁度フレイベル生れて百五十年と三日目

の今日、此の大教育者の子ども時代を深い思ひ、なつかしい思ひで偲ばしく思ふのであります。

(昭和七年四月二十三日筆記)

## 本會主催

### フレイベル誕生百年記念講演會

豫報のとほり四月二十三日午後一時半より、誕生百年の四月二十一日を記念する講演會は東京女子高等師範學校講堂に開催。花輪にて飾られたフ氏肖像の額の下に會集數百名の盛會であつた。堀前主幹の司會にて、倉橋主幹は『フレイベルの生れた家』と題して往年彼の生地を親しく訪ねられた感懷をたどり、子供時代のフレイベルを偲ばれ、次に、フ氏の精神を現代的に最もよく理解し、その最も熱心なる實驗者體驗者なるアルウキン女史は、特に本記念會のために病中をおして壇上に起ち、熱烈な讚美を以て教育者フレイベルを語られた。